

バカと理性が蒸発  
中っ！

腐った林檎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アストルフオ（中身は別）が明久たちと一緒にバカをする話。

# 目次

プロローグ	1
第一次試験召喚戦争	
文月学園	10
静かに涙する者、その者の名は須g	
22	
君の胸は。	31
静かに涙する者、その者の名は須g	
②	40
帰宅	61



# プロローグ

男の娘。ローマ字表記ではOtokonoko。

それは男なのにも関わらず美少女の姿を持った者のことを指す。

まあ、つまり女の子にしか見えない男の子ってことだね。ギャップ萌えというか背徳感というか……まあ癖になる属性だ。男の娘というものは。

数多くのアニメや漫画にも男の娘が登場しており、決まって人気上位に食い込む魅力たっぷりだ。僕が彼らによって幼い頃に性癖が歪んでしまったほどに。その魅力に気づいた後は、底なし沼にハマるかのよう沈んでいくぞ。男の娘の沼に。なんか言い方が卑猥だな。乱淫みたいで……なんでもないです。

そんな男の娘の中でも、史上最強四天王ともいえるキャラを上げてみよう。

まずは大天使戸塚エル。

やはり俺の青春ラブコメは間違っているに登場した男の娘だ。主人公の友人ポジションに落ち着いてはいるものの、『戸塚が女だったら惚れてた』と主人公から引き出すほどの魅力。

一期の戸塚が最カワだった。メイド姿に僕は発狂したね。アレは人を殺めるほどの威力があるぜ……。惜しむらくは、二期三期の作画が変わってしまったことか。個人的には一期の方が作画は好きだったなあ。

次にスイーツ將軍こと朱里小十郎。

正直なところ、知名度は戸塚と比べて落ちてしまうだろう。アニメでも主人公の友人ポジションにも関わらず登場は少なかった印象がある。というか男の娘って友人ばっかだなおい。

まあ、アニメの作画が良くなかったってのもあるけどね。だかしかし、僕は皆に漫画

版の彼を見て欲しい。めっちゃ可愛いんや。登場回数も多いし、何より男の娘が恋をするんやで？ 最高じゃないですか。

そして第三の性別木下秀吉。

恐らく、男の娘文明を切り開いたのが彼だ。彼によつて性癖が歪んでしまった人が何人もいるだろう。もちろん僕もその一人だ。ていうか初恋である。うん、姉の優子と同じくらい好きやった。そして男だということを知った時、『むしろ男が良い！』ともっと好きになった。まあ、結婚するなら優子かなあ。性別的に無理だし。

十年程前のラノベの登場キャラだが、今でも熱狂的なファンが存在している。例えば僕とかね。アニメを軽く十回ぐらいは見返した気がする、うん、流星に十回は言い過ぎだった。四、五回ぐらいいかな。

最後に、理性が蒸発した騎士アストルフオ。

Fateにて黒のライダーとして活躍した彼は僕の待ち受け画面レギュラーであつ

た。彼を引きただけの一心でゲームを始め、やつこのことで手に入れたあの瞬間は今でも脳裏に浮かんできてる。体験したときのある方はご存じだろうが、推しを始めて引いたときの感情はヤバイ。

たとえば街中であつてもスマホを握りしめて発狂する自信がある。そうだな……、百億円宝くじを当てたときぐらいかな。うん、上手い例えがないけどそれぐらいヤバイのだ。

とにかく、僕が言いたいのは男の娘は最高だつてこと。

あーあ、どうせならリアル男の娘に出会いたかつたなあ。そういうお店もあるだろうけど、僕はそこまでの勇氣はなかった。物は試しで挑戦しておけば良かった。ちくしゅう、もし来世があるんだつたら絶対男の娘見つけてやる。

そんなことを考えながら僕は暗闇の中に落ちていった。

☆ ☆ ☆

「……起き……ルフォー！」

誰かの声が聞こえる。

「……起き……じゃ……ストルフォー！」

ていうかすごく寝心地がいいなこのベッド。すごく滑らかで温かくていい匂いがして、フワフワな羽毛布団みたいな感じ。

「起きるのじゃアストルフォー！」

「ふあっ!?!」

突然、ゆさゆさと肩を揺らされ意識が覚醒する。

「良かったぞい、このまま起きなかつたら初日早々遅刻になるところじゃった」  
「え……あ、ごめん？」

「ほれ、早く着替えんか。いくら同性じゃとしてもその姿は目に毒じゃからな」

「とういかなんでワシの布団に潜り込んでたんじゃ……」と言いながらベッドから降りる秀吉。張本人であるボクも何故秀吉の布団に潜り込んでいたんだろう。さっぱり分からない。

……秀吉？

「そういえば先日の振り分け試験は——

「ひいひいでえええよおもしろいひいひい!」

——どうしたんじゃあああ!」

秀吉がいるっ! 秀吉が、僕の初恋がいるうう! どういうことだ? もしかしてボクはバカテスに転生したのか? いや、そんなことどうでもいい! 今、秀吉が、ボクの前で生きているんだ! ひつでよしい!

「お、落ち着くのじゃ！抱き着くでないっ！」

「んんう、秀吉がいる。僕の前で、秀吉があ」

「どこを触っておるのじゃ！そこはっ、んっじゃあ!？」

むふー！堪ないよなあ。まさかリアルで秀吉に会うことが出来るなんて……死んでよかつたぜ！秀吉が制止の声を上げているが今のボクには無力だ。据え膳食わねば男の恥よ！

「あはっ、秀吉い。もつともつとお」

「んっ、じゃあ！ああっうにゅっ！」

ガチャツ

「うるっさいわね！先に行つて……つてえええ!？」

「あはっ！優子もいるううう！」

「ちよ、一旦落ち着いてやああああ!？」

「はあ、はあ、危なかったぞい……」

「優子おとおお！」

「きやあああああああああ!!」

この後めっちゃ説教された。嬉しかった。



## 第一次試験召喚戦争

### 文月学園

時刻は明朝。

「……………生まれ」

文月学園の校門を通ろうとしたところで、筋肉隆々でゴリラ顔の男——西村先生に呼び止められる。隣で歩いていた優子と秀吉はボクを置いて先に進んでしまった。置いてかないで欲しい。

「通学中の会話？んなもん緊張し過ぎて覚えてないわ。最初は頑張ったけど中盤辺りから「それな」と「マジ？」しか言わなくなったのは辛うじて覚えている。」

「そうだな、覚えてる限りで簡単に説明すると」

優子に怒られる

←

時間が差し迫っていることに気づく

←

急いで学校に向かう

←

学校に到着した（今ここ）

てな感じ。

あ、それとクラス分けは勿論Fクラスでした。くそう……嬉しくて涙が出るぜえ……。

「どうしたんですか西村先生」

優子と秀吉の後ろ姿を惜しむように見つめた後、西村先生の顔を見て応える。

正直なところ、朝から指導とかは勘弁……なわけないだろウ!? むしろ喜んで指導されますが？

「お前なんで女子の制服着てるんだ？」

はい来ましたド正論！ボクだって自ら着ようと思ったわけじゃないんだヨ、気づいた

ら着てたつていうか人間のサガっていうか、ねえ？たぶんコレは優子の制服だな。

そもそも同じ屋根の下に優子と秀吉がいるのがダメなんだ。憧れっていうか初恋ていうかそういうの的だったキャラが二人も同じ家で、同じ空気を吸っていたら最早やらない方がおかしくないか？

そう、ボクは被害者なんだ。本能的な十二かに襲われて強制的にやらされたんだ。不可抗力、なのでボクは無罪を主張します！

でもそんな長つたらしいことを今から先生に説明するのか？

いいやダメだ、もしここで時間を費やしてしまったら原作主人公たる吉井明久との情熱的な出会いが出来なくなルウ！よし、ここは短く、適切に先生に伝えよう。唸れボクの百枚舌よ！

「それな」

「お前何言ってるんだ」

「ぴえん」

「大丈夫か？」

「草」

「よし、俺が腕の良い医者を紹介してやる」

省きすぎたああああ！っていうか国語毎年C判定だったの忘れてたああ！一番ボクに

求めてはいけないものだったのにボクはなんてことを……自ら自分の首を絞めてしま  
うとはチクシヨウ。

てか先生優しすぎん？頭のおかしい生徒を心配してわざわざ腕利きの医者紹介して  
くれるとかゴリラ越えてオラウータンだよ。誰か頭の良い人がオラウータン型ロボッ  
トとか作つてくんないかな。いや出来るわ、試験召喚システムなんていう謎技術を発明  
してるぐらいだからそんなこと余裕に決まつてたね。

そもそも優子と秀吉なんでボクのこと待つててくれなかったんだらう。朝の反応を  
見る限り好感度は高い気がしたんだけどなあ。

あれ？これってツンデレ……いやそれはないな。ないない。でもツンデレじゃな  
かったら少し寂しいなあ。推しに放置されるボクつて……ありかも。正直ナイスプレ  
イだ。そうか、そういうことだったんだね双子シスターズ。

ちよつと待て、優子たちと別れて何分経つた……？もしかしたらボクを差し引いて原  
作突入してしまつていたり…!?嫌だ、それは絶対に嫌だ。

ボクだつて明久の《見せられないよ！》見たいしムツツリーニが撮つた《アーッ！  
》も見たい、秀吉の《自主規制》な姿も見たいし雄二と霧島さんの《グロテスク注意報  
》も見たいんだ！

「オラウータン、悪いけど僕急いでるから！」

そう告げて踵を返し校門をくぐる。

本当はもう少し喋りたかったけど、まだ話す機会はあるはずだ。次を楽しみにしておこう。

「西村先生と呼べ！次間違えたら指導室送りにしてやる！」  
絶対間違えてやる。この命に代えてでも。

☆☆☆

無駄に広いとしか思えないAクラスの教室は無視して廊下を疾走する。

すごく今更感が強いがボクはアストルフオの身体に憑依転生してしまったらしい。正直なところ、めっちゃ嬉しいぜ。皆一度は考えたことなかった？もしも自分がこのキャラだったらとか、ありもしない空想するアレ。今、その現象がボクに起こっているのだ。

本当に何不自由なくこの身体は動くし、声を出そうと思えばアストルフオの声が出る。はい、最高です。死んでよかったよ。来世最高！

だからというか、前世と比べて身体能力が上がった気がする。いや違うよ？前世のボ

クの肉体が欠落品だったとかじゃなくてね、この身体は常人を越える驚異的な身体能力が……てそりやそうだろうウ!?

アストルフオはな、最弱だとか呼ばれてるが常人と比べたら単なるヤベー奴にしかないんだぞ!?!でも、それだったらもう少し早く走れてもいい気がするんだけどな。

……もしかしてボクの運動神経が関係して最終的に低下してしまっているのでは？

くそう。前世美術部じゃなくて帰宅部入つときやよかった。それなら足腰が鍛えられて少しは改善されたかもしれないに……!いやでも、美術部では繊細な絵のタッチが求められるから技術面に関しては向上しているはずだ。

あ、Fクラスじゃん。

ザッ

……おおう、急ブレーキしたら焦げた足跡が廊下に残ったんだが。これ弁償とかないよね？一応足で払って誤魔化すか。

ふきふき

消えねえー！普通に考えたら消えるわけがねえー！ま、まあ過ぎたことはしようがないよな。うん、不可抗力不可抗力。もし怒られてもこの類稀なる身体能力で逃げよう。ただし西村先生を除く。

「よし。は、入るぞお」

引き戸に手をかけ、自分を鼓舞するように言葉を出す。

大丈夫、ここから先はバカしかいない教室だ。もし友達が出来なくて孤立しちゃっても秀吉が傍にいてくれるはずだ。それに明久や雄二、ムツツリーニだっている。通学中に秀吉から聞いたけどボクは中学時代あのバカたちと色々とやらかしたらしい。だから最悪クラスに馴染めなくても彼らがいる限り僕は安泰だ。

そう意気込んで、一気に扉を引く。

「ど、どうもこん——」

「総員ペンを執れ！俺達に必要なのは卓袱台ではない！ Aクラスのシステムデスク

だ！」

『『『うおおおお!!』』』

いや、キミたちに必要なのは正常な思考だと思う。

やっべ、思わずつつこんじやった。でも普通扉開けたら、これから先交流するであろう男子たちが狂演乱舞してるとは予想しなくない？逆に予想できるとお思いで？

てか雄二の名シーン見過ごしたああああ!!せつかく転生したのに!!最後だけしか見せないとか……映画予告の逆Verかよ!

急いで教壇を見るとゴミを見るかのような目で見下ろしている雄二がいた。

つべーよ、つべーよ!本物がおる。元神童が僕の前で生きてる。なんか四人目くらいの原作キャラだけど未だに興奮してしまうぜ、そう、例えるならお年玉全てを課金につぎ込んだあのトキの気分のような……。つは!危ない、ボクの黒歴史が急に脳裏に映し出されたクソツ。ええいボクは雄二を見るんだ。雄二に全ての思考を

「ん?遅かったじゃないかアストルフオ」

あ……もう思考が飛んだわ。

「あー良かったよ、やっぱリアストルフォもFクラスだったんだね」

あきひさ が はなしかけてきた

神よ……貴方は僕を殺すつもりですか……？お、落ち着けボク。まずは深呼吸だ。鼻から吸ってケツから吐いて……よし、頑張るぞ。

「ウン……ソウダツタヨ……」

上手く喋れてるかな。少しカタゴトみたいになってるけどテンパって失敗するよりはマシだね。いやー、何度も驚愕するとかえって冷静になるってのは本当だったんだネー。

「あはは、そんなに落ち込むことないよ。試験直前まで消しピンやってた僕らがFクラスじゃない方がおかしいのさ。ねえ？ムツツリーニ」

「……………今忙しい」

うわあっ?!よく見たらムツツリーニが畳みに這いつくばってた。全然気付かなかったよ……。あ、近くに姫路さんの姿もある。もしかしてだけどもツツリーニは姫路さんのパンツを見ようとしてるのだろうか。そういうの、嫌いじゃないよ。

「うん、姫路さんのパンツの写真と友達である僕のどちらが大事なのかな？それと写真撮れたら頂戴」

「……………決まっている、パンツだ。それと値段は二百五十円」

「無機物に負けたあああ！……………僕の夜ご飯代か、背に胸は代えられないっていうしね」

「何か言ったかしら吉井？今島田さんに胸は与えられないって聞こえたんだけど」

「そんなこと言っていないよ!」

明久の呟きに島田さんが過敏に反応する。続々と来るな、原作キャラ。

ぶつちやけ島田さんは秀吉とか明久みたいに特別会いたかったわけでもないしなあ、あんまり驚かない。……………ちよと待て、それだとボクがまるでホモみたいな感じになっちゃうじゃないか。違う、僕はホモじゃない。秀吉は秀吉だし、明久は明ちゃんだ。ボクはホモじゃない!

「……………今ならアストルフォ×秀吉の着替え写真もある。値段は三千円」

「買った」

てか明久かわいくね!? 驚愕の事実なんだが! いやまあ確かに秀吉と比べたら見劣りはするさ。でも女装すれば女にしか見えないような顔はしてるよね……………ボクの守備範囲ギリギリつてところかな。背の高さはボクが少し大きいぐらいだ。といっても数センチの誤差なんだけどね。

もちろん、ムツツリーニも可愛いよ（ホモ解放宣言）

「よし、アストルフォも到着したことだし早速Dクラスに宣戦布告でもするか。明久、頼

んだぞ」

「え、あ、うん。分かった行ってくるね」

明久がボクの横を通り過ぎ、廊下に出る。

「ちよちよつと待って！」

「え？」

やば死んだ。思わず声かけちまった。特に話すこともないのにチクシヨウ、まるで陰キヤミたいだなボク。と、とりあえずそれっぽい言葉を投げかければいいよな。

「その……頑張ってるね」

「……う、うん。じゃあ行ってくるね」

少し目を見開いたまま硬直していた明久だけど、すぐに立ち直ってDクラスへと走り出した。

「俺達のアストルフオと話すなんて羨ま……殺すか」

「いや、出来るだけ痛みつけて放置してやろう。骨の髄まで調教してやる」

「火炙りにしてやろうか」

あ、FFF団みつけ。



## 静かに涙する者、その者の名は須g

「さてと……」

明久を見送った後、辺りを見渡すともうグループが出来上がっているようだった。そしてボクは一人ぼっち。秀吉たち原作組は教室の隅に集まっていた。は、入って良いのかなあ。

やべ、入学初日をミスったみたいになってるぞボク。で、でも雄二とか明久とかはボクと面識があるっぽい感じで話してきたからボクもあのバカ四人組の一人つてことでもいいのか？情報がなさすぎて判断が出来ない。

一応話すことに若干慣れてきた秀吉がいるっちゃいるんだけど……くそう。なんだあの壁は、めつちや入りにくいな。

やつぱり原作組の中に入っていくのは非常に困難だ。あそこに突っ込むのは死地に赴くの に等しい。まだ死ねん。秀吉の水着姿を見てないのだ。

よし、ここは席に座って空気と一体化しよう。

……Oh。想像以上に座布団が薄いね。足が痛い。

「アストルフオ……さんで良いのかな？良かったら座布団貸そうか？」

前に座っていた男子が振り向いて声を掛けてくる。どうやら声に出てたみたいだ。

正直座布団を貸そうとしてくれたのよりも声を掛けてきてくれたことの方が嬉しい。今のボクはポッチではない、話し相手がいるのだ！

「良いの？」

「陸上部で足腰は鍛えているからな、問題ない」

「そっか。じゃあ遠慮なく拝借させていたどうかかな」

「ああ。それでついぞといったら何だが……今週末一緒にカフェにどうおっ!!」

前の男子から座布団を受け取る寸前、シャーペンが頬を掠める。ボクではなく、前の男子に。

「へへっ……抜け駆けは俺が許さないぜ」

「アストルフオさん！そんな奴の座布団なんて汚臭しかしねえよ、俺の座布団を使ってくれ」

「バカ、お前みたいなのがサイクの座布団をアストルフオさんが使うわけないだろ」

「俺のは他のと違って汚臭がしない。なんてったって俺の匂いで上書きしてるからな」

ああ……そういうえばバカテスってこんなノリだったなあ。

なんだか本当にバカテス世界に来たんだなって一番実感した。たまにめんどくさくなるけどF組の男子はいつも僕を笑わせてくれたし、中でも須川くんが一番好きだ。もちろん恋愛感情ではなくキャラとして、ね。

「お前ら……揃いも揃って愚かしいぞ」

「「お前は……まさか須川!?!」」

「須川だと……?あの彼氏にしたいくない男子ランキング殿堂入りしたアイツか?」

「顔面土砂崩れと呼ばれている……」

「噂は本当だったのか」

あ、噂をすれば本人ご登場。ちよつと顔が泣きかけてる。

「いくら薄汚い座布団を積んでもゴミに変わりはない。だから他の物で代用するべきではないかと俺は思う」

目元を拭ってその場で立ち上がり、男子たちに教えるように演説を続ける。

意外と良いこと言うなあ。本当に須川か?

「他の物とは？」

「俺達が座布団になれば良いんだ！」

「なるほど、名案だな！」

前言撤回、クズは所詮クズでしかなかったようだ。

「俺達は座布団だ。アストルフォさんのキュートなヒップを守護る重大な任務を果たせ

！」

「応！俺達の身体は無限の座布団で出来ている！」

下品な顔をして各々畳に寝転ぶ。

「さあ！俺に乗ってくれ！」

……正直言うとうとしくシユールな光景である。というか普通に気持ち悪い。同性のそんな姿は見たくないし、同性でなくとも見たくない。ただし秀吉と優子は除く。

でもボクは特別焦ろうとはしない。バカテスのファンとして、物語の第三者の目線からすれば彼らの扱い方など熟知している。ノリが良く流されやすい……そういう人間だ、彼らは。

だから

「ボク……物静かな人の方が好きだな」

「……………」

僕の言葉で動きが止まり、それからゆっくりと立ち上がる。

「今日も……いい天気だな」

「ああ。まるでアストルフオさんの笑顔のようだ」

今日からボクはポ○モンF組男子の支配者マスターと名乗ってもいいのではないだろうか。

「……物静かな人が好み……のう」

「……どうした秀吉」

「い、いや。なんでもないのじゃ」

「……………」

なんか今秀吉の声が微かに聞こえた気がする。早くそっち側に加わりたい。

ガタツ

「ひ、ひどい……D組嫌いだ……」

「おう。早かったな明久」

扉が開き、ボロボロの明久が出てくる。

あー……やっぱそうなるよね。うん、知ってた。

「聞いてよ雄二、D組の人たちときたら僕が宣戦布告した途端襲い掛かってきたんだよ」

「ふむ。まあそうなるわな」

「だよね。ホント信じられ——え? どういうこと?」

きよとんと雄二の顔を二度見する明久。かわええのう、男だけど。

ボクがバカテスに転生して最も楽しみなこと、それは三つ程あるのだが……その中に明久の女装というものがある。最初に物語内で女装したのはいつだったか忘れたが、度々明久がアキちゃんに変身していることは周知の事実。

そしてボクがFクラスに入ったという時点で明久の女装を拝むことが出来る可能性はグンと上昇した。なおかつ、あの原作組の中に入れば文句はないのだが……それが難しいんだよなあ。

「え? 雄二はこうなるって分かったの!?! じゃ、じゃあムツツリー二も? もしかして秀吉まで!」

「よく映画であるだろ。敵側の使者を殺すとか」

「……」一般常識

「予想はしておったの」

明久の顔から表情が抜け落ちる。

「島田さんと姫路さんもまさか……」

「当然の結果ね」

「薄々感じ取ってはいましたが……」

「そんなあああ!」

仲間たちの辛辣なコメントに膝から崩れ落ちる明久。助けを求めるような顔でボクを振り返る。

「ア、アストルフオは?アストルフオも気づいてたの!」

パリーン(ガラス☆ハートが破壊される音)

……おつふ、直撃はやバかった。

緊張で震えぬように気をつけながら、声を絞り出す。

「う、うん」

「嘘だ……僕がこんな有り様になることも分かっていたのに笑顔で送り出しただなんて……信じたくない……!」

主人公と喋っちゃた。今更だけど。

「明久。俺達はお前なら出来ると信じていたんだ。それなのにお前は……」

「うっ……そうだよね。ごめん雄二、僕の実力不足だったよ」

「分かればそれでいい。獅子の子落としともいうからな」

「し、四肢の子脅し……?」

「どうした明久?」

「い、いや何でもないよ！雄二の言う通りだなと思ったただだよ！」

まさかだとは思いますが、意味が分からないなんてことはないよな。……あの狼狽ぶりなら有り得るか。小学生からやり直した方が良いと思う程のポンコツ頭だし。

あれ？でも獅子の子落としの意味って我が子に試練を課して一人前に成長させることだよな。お前なら出来るって口では言ってたけど心の仲では出来ないと思ってたのか。嘘八百だなおい。

「そういえば如何せん盛り上がり欠けると思っていたが、アストルフオがいなかったのか」

え。

「……………確かに」

「うむ。アストルフオよ、もつと近くに寄らんか」

「ハ…………ハヒツ!？」

やべ、声上擦っちゃった。ていうかちよつと待ってこれ、もしかしなくても歓迎されるパティーンなのでは!？」

「そうだよアストルフオ、遠慮なんてしないでさ。ほらっ」

明久がボクの後ろに回り込んで背中を押す。

「あ、ちよつと急に押さな——」

「きゃあああ!?!」

勢い余ってボクは美波（あ、いたんですねw）を押し倒してしまふ。ふむ、この右手に伝わる感触はまるで固められたコンクリートのような角ばっていて………Oh。これが水平線か。

「………何か言い残すことはあるかしら?」

「強いて言えばもうちよつとあつた方が待つてボクの腕は全可動式じゃなああああ!?!」

仮にも英雄であるアストルフオの腕を折り曲げる美波は凄いと思う。

というか何気に美波とは喋つてなかつたな。それと姫路さんとも。一番最初の会話が胸つて………まあバカテスだし。らしいっちらしいけどさ。もうちよつとマシな内容が良かったなあ。

## 君の胸は。

「大丈夫かの？アストルフオよ」

「うん……なんとかね」

心配するように声を掛けてくる秀吉に苦笑して返す。

ボクの右腕を心配してくれるなんて秀吉は優しいなあ。思わず涙が零れてしまうよ。雄二の「唾かけときゃ治る」とは大違いだ。流石僕の将来のお嫁さんだけはあるね！

まったく、美波ときたら……。ボクじゃなかったら死んでたぞ。アニメで見ている側だったから面白かったけど当事者になったらたまったら死んでたぞ。アニメで見ている側だった。後で絶対やり返してやる。覚えてろよ。あの胸元水平線め。

「不思議ね。まだ殴り足りないわ」

「美波、暴力的な女の子は嫌われるよ？」

「か弱い女の子の胸を触るアンタの方が嫌われるわよ」

「うわ、自分で自分のコトか弱いって言っちゃうんだ。ボクドン引き。それとボクの方が嫌われるだって？ははは、冗談は胸だけにしといてくれよ。彼女にしたくない女子ラッキング連続一位の美波様に言われたくないなあ」

「……離しなさい雄二。コイツには地獄を見せないといけないのよ」

「落ちて美波。コイツを死なすのはここじやなくていい」

「おやおや？ 下から敗北者の戯言が聞こえますねえ。まあ、何言ってるのか分からんけど。死人に口なしってか。美波に胸なしってか。イエーイ、ペロペロバー」。

「くっ、殺す！」

くっころの使い方間違えてると思う。

「……まあいいわ。坂本にも何か考えがあるようだし、殺すのももう少し後にするわ」

「ふう、これが負け犬の遠吠えってやつかな」

「……今殺しても良いのよ？」

「それはこちらのセリフだよ美波」

お互いに激しく睨み合う。いくら体術に長けた美波とはいえ英雄であるアストルフオの身体能力に勝てるわけがない。そう、さつきだつて美波がボクの腕を明後日の方向に折り曲げて……折り曲げて。

「アストルフオ、島田さん。そんなに怒らなくてもいいじゃないか。ほら、一緒にお昼ご飯でも食べて気をまぎわらせよう？」

「そもそもこの事態の発端は貴様だがな明久。貴様さえボクのことを押ししていなければ美波が死ぬなんてことにはならなかつたんだ。うん、そうに決まっている。さつきの

は偶然だったに違いない。

「アンタお弁当なの？」

「うん。いつもは塩に水をかけた塩水に水に塩をかけた水塩のフルコースなんだけどね。今日は気分が違ったんだ」

「ふーん。ボクも興味あるな、見せてくれない？明久の弁当」

「良いよ」

明久が弁当を取り出し、蓋を開ける。中には明久の言う通り少量の塩が入っていた。

「朝食べ過ぎたからお昼はちよつと少なめにしといたんだ」

「ふーん。美味しそうだね」

「………塩」

「塩じゃな」

「塩だな」

「現実を突きつけないで！」

涙目で嘆く明久。そんな思いするぐらいだったら生活費をゲームに溶かさなきゃいけないのに。自業自得だよ。

雄二が息を大きく吸い込む音が微かに聞こえたけど、気にせずムツツリーニに話しかける。どうしても聞きたいことがあったんだ。

ムツツリーニはその名に恥じぬムツツリで、彼のムツツリ商店を築いた立役者だ。ア  
ニメでも彼はキヤツキヤウフフな展開と赤色の花火でボクら視聴者を大いに沸かして  
くれた。個人的にも好きである。

「そういえばムツツリーニ。秀吉の写真ってある？」

「一枚五百円」

「おけ」

「あ、僕も欲しい————ってああ！」

明久が何かに気づいたかのように声を荒げる。

「どしたの明久」

「僕の……昼食がない……」

手から弁当箱が転げ落ち、ボクの足元で止まる。ふむ、確かに先程あった塩が消えて  
るな。……犯人は雄二だな。隣にいたボクなら分かる。明久の隙を見て全力で息を  
吹きかけてた。

ドンマイ明久、さようならソルト。

「そ、そんな……僕の生命線が……」

「よし。明久の昼食が酸素と水に決定した所で、試召戦争について話すぞ」

項垂れる明久を他所に雄二が本題を切り出す。何も知らないような顔をしやがって

……やったの雄二でしょーが。明久には今度コーラでも恵んであげよう。全力で振った後のモノを。

「雄二よ。疑問なのじゃが何故Dクラスに宣戦布告したのじゃ？段階を踏むならEクラスが妥当じゃろうに」

「Eクラスの身体中が筋肉で出来てる奴らに宣戦布告をしても結果は見えてる。正直なところFクラスとEクラスの間には大した差はないし、Eクラスの連中はスポーツ系が多いから戦略もきつとお粗末なはずだ。脳筋ゴリラってわけだな」

「Eクラスよりもバカな連中が集まってるFクラスはどうなるの？」

「……………まあ、他にも理由はある。Eクラスなんて戦うまでもない相手だからな」

「露骨に無視された。我、号泣。秀吉に頭なでなでももらわないと死んじやう」

「よーしよーし、もう安心じゃぞー」

ふわあ……………ここが天国やったんかあ……………（昇天）

「でも僕らFクラスにとっては格上だよ。振り分け試験のときの結果が反映されるんだし」

「明久。周りの面子を見てみる」

「え？えーと……………美少女三人にバカ二人にムツツリが一人いるね」

「誰が美少女だと!?!」

「……………(ポツ)」

「アストルフオ以外合ってないよ!?!というかなんで美少女に反応するの!?!」

あ、ボクは美少女でいいのね。

「俺が美少女なのは百歩譲ったとして……アストルフオが美少女?それは間違いだぞ明久」

「え?どうして?どこから見ても美少女じゃないか」

「コイツは秀吉に頭を撫でてもらっている間、密かに秀吉の胸に手を忍ばして有無の判断をしていたからな。ムツツリの杵に収まるべきだ」

何をバカなことを。ボクがそんな悪徳満ちたことをするわけないじゃないか。どうやら雄二神は神といつても悪の神だったらしい。今度祈禱師を招いて退治してもらおう。悪霊退散。

「そ、そうじゃったのか!?!」

「いや、違うんだ秀吉。信じてくれ。誤解なんだ」

「……………本当かの?」

「本当だよ。雄二の命を賭けてもいい」

「おい待てアストルフオ!何故そこで俺の名前が出てくる!」

「……………了解したのじゃ」

「了解するな秀吉い！」

む、ハエがうるさいな。ここは少し黙ってもらうことにしよう……いざ、伝家の宝刀を抜かん。

「霧島さん」

「俺が悪かった」

よし、敵艦隊消沈確認成功。やはり坂本雄二特攻の霧島さんは強いなあ。

「……………アストルフォ（つんつん）」

「ん？何か用かなムッツリーニ」

「……………サイズは？」

「触った感じだとAとBの中間辺りってところかな」

「……………（グツ）」

「やはり嘘じやったか！」

ムッツリーニのグツトサインにこちらもグツトサインで応える。持つべきは変……友達だね。それと秀吉、ボクは嘘をついていないなんて一言も言つてないよ？勝手に信じる方がバカなのさ。それにボクが嘘をついたことを追求されても被害が及ぶのは雄二だけ。なんて素晴らしい社会体制なんだ。

「ま、まあ、美少女云々は置いといてだ。俺はこの面子ならEクラスに勝つことができる

「思っている」

「ぶっちゃけ姫路さんだけでも勝てそうな気はするしね……」

確かに。アニメでは姫路さんは切り札として最後に戦闘に加わったけど、本当のところ一人だけでEクラスぐらいは倒せるんじゃないだろうか。

「さ、流石にそれは出来ないですよ」

「いいや姫路さん。君ならきつと出来るさ」

「でも……」

「想像して欲しい。Eクラスがクリボーだとしたら姫路さんは大型クツパ。Eクラスがゴミだったら姫路さんはゴミ収集車。EクラスがAカップだったら姫路さんはGカップ。分かった？」

「は、はい」

洗脳完了。

ゲヘへ、Dクラスの連中……待ってろよ。最強の鬼（ボクではない）が地獄に招待してくれるぜ……。

「さて、作戦についてなんだが………姫路は序盤温存することにする」

楽しませてよお。

## 静かに涙する者、その者の名は須g ②

埃が積もったFクラスの教室で、ボクは明久とお・は・な・しをしていた。

「ありがと、明久。須川から全部聞いたよ」

「うううっ……えぐっ……！」

涙を流しながらボクに頭を下げる明久に、そつと優しい声で慰める。

「ボク達のために犠牲になろうとしてくれたんでしょ？」

「ア、アストルフオ……」

頑なに顔を上げようとしめない。鼻声だったからきつと鼻水もダラダラ流してるんだろう。もう、本当に気にしてないのに。変なところで真面目なんだからな明久は。こういうので島田さんとか姫路さんは惚れたんだろうなあ。

「泣かないでよ明久、男でしょ？」

「だって……！アストルフオ……僕を庇って……！」

ようやく、明久が顔を上げる。涙と鼻水でせつかく整った顔も台無しだ。懐からハンカチ（優子のスカートのポケットに入ってた）を取り出して拭いてあげる。

「うぐつ……、ブエックション！」

「あべし」

鼻水が顔にもろに掛かったけど気にしない気にしない。ボクの心は琵琶湖のように広いのさ。ずびーつと鼻をかみ、明久が口を開く。

「だって……！」

「うん」

「アストルフオの……貞操が!!!」

「ははは。安いものだよ、ボクの貞操ぐらい……明久の貞操が無事でよかった」

例え下駄箱の中に『校舎裏で待ってます』と書かれたラブレターを見つけて、実際に行ってみたら結婚適齢期を過ぎたにも関わらず独身であることに焦り生徒にも手を出す変態女先生に襲われることになって、命からがら逃げだしたらラブレターを書いたのが明久であったことを知ったとしてもボクは気にしないさ。

「アストルフオ……」

「明久……」

腕を明久の背中に回し、ゆっくりと抱き寄せる。ああ、そうだね。言葉を交わせずと

も君の言いたいことは手に取るように分かるさ。焦躁、罪悪感、そして……喜び。

ふふ、まさかこんなことになるとは露ほど思っていなかったよ。想像の斜め上を飛んでくるね明久は。

「……ア、アストルフオさん？ちよつと力が入りすぎてるように気が……！」

「明久……ボクの気持ち受け取ってくれるかい……？」

「ちよ……！締まつてる、締まつてるからあああ！」

もう、暴れないでよ、気持ちは分かるけどさ。ボクもついさっきまで味わっていたからね、キミにもスグに実感させてあげるよ。ただし、方法はボクが受けたモノとは少々異なるけどね。

「いつまでもキミを抱き締めるよ——楽に死ぬると思ったか？」

「ぎゃあああああああああああああああ！」

旧校舎に明久の叫び声が響き渡った。

くお☆様が通りますく

「ふう……さつぱりした」

「お、仇討ちはできたか」

明久の死体を引き摺って教室から出ると秀吉と雄二とムツツリーニがボクのことを待っていてくれたのか廊下に立っていた。

雄二の問いに、親指を立てて応える。といっても命までは流石に獲ってないけどね、これぐらいなら一時間後には歩けるようになるだろう。ギャグ世界だし。

鞆を背負い欠伸をしている雄二に一応例のことを確認する。

「雄二、そっちは上手くやったの?」

「そっちと言われても分からん」

「Dクラス戦についてだよ」

「ああ、それか。アストルフオの点数が0点なんていう不測事態もあつたが無事姫路がDクラスの代表をワンパンして勝利だ」

うぐ、雄二結構根に持つてるな……。ボクだってまさか0点だとは思わなかったさ。

西村先生にも確認を取ったけど名前欄に『超絶美少女アストルフオ見参☆』と書かれて

いたため無得点扱いらしい。なんてバカなことをしてくれたんだボクウ……。

召喚しようとしても一向に召喚獣が現れないから皆から可哀そうな子を見る目を向けられていたのは勘違いだと思いたい。時間稼ぎにはなったかもしれないが。無得点だと召喚もされないんだね、まあ召喚した時点で死亡扱いだから当然だけでも。

雄二のセリフ（一部分）は聞き取れなかったフリをしとくか。

「へ、へー。それじゃあ一応作戦通りに行ったってことじゃん。凄いじゃないか、流石元神童。人を見た目で判断してはいけなかったんだね！」

「そうか？俺としては及第点といったところだがな」

素直に褒めてあげると、嬉しくなさそうにそっぽを向いてしまった。これはデレてるのかな、よく分からない。経験値不足なんだよお。それにしてもストイックすぎないか雄二。やはり他が認めても自分が認められなければダメなのかな。

とりあえず、作戦通りに行ったということは、FクラスがDクラスに勝利したということだ。よしよし原作通りだな。ここで変な路線に変わったらファンとして悲しかったので一安心だ。明久への執行中もそれが気になってしようがなかった。

そもそも何故こんな悲劇が起きたかというと、発端はとある校内放送である。ボクは生憎聞こえなかったが——須川くんの声だったらしいけども——その放送の内容は

とある婚期を逃した女性教師に対してのメッセージで、校舎裏に明久が待つてゐるから早く来てくれというもの。

そのとき偶然にも校庭の隅で秀吉の写真をムツツリーニから買い取つていたボクは明久の身代わりにされたということである。あの人明久とボクの区別も出来ないらしい。必死に「ボク明久じゃないです！アストルフオです！」と誤解を解こうにも「既成事実作つてやるんだからあ！」と叫んで聞く耳を持たない。気分は青鬼に追いかけるひろしでした。

一階から二階まで一気にジャンプして逃げたので船越先生も流石に諦めたつぼいけど。

そして、先程教室にてボクを身代わりにしたにも関わらず「いやーモテる男の娘は辛いねーアストルフォー」と白々しく声を掛けてきた明久に正義執行していたわけである。まあ『校舎裏に来てください』なんていうラブレターにつられて暢気に告白の返事を考えながら校舎裏で待機してたボクもバカなんだが。もちろんラブレターの主は明久でした。文字も女の子風にしてたから気づけなかったよ。

よし、試召戦争は無事終わったし明久のことは雄二に任せて先に家に帰るとしますか……つてアレ？

「そういえば秀吉。島田さんと姫路さんはドコにいるの?」

「姫路の行方は知らぬが……島田なら須川に用事があると言いつきり残したつきり帰って来ないぞい」

「さらば須川くん……安らかに眠れ」

とりあえず、合掌。地獄で反省してきてらっしやい。

「ん……ここはどこだ……?」

「む、起きたか明久よ」

早くも明久の意識が覚醒したようだ。

結構力込めて絞めたのに目覚めるには早すぎないかと思うけど、日頃から島田さんの肉体への物理攻撃を喰らってる明久ならボクの抱き締め攻撃なんて屁でもないのかもしれない。

「確かDクラスの代表を姫路さんが倒してそれから……」

頭を押さえながら明久が立ち上がる。少しよろめいてるからダメージは残っているんだろう。でもこんなにも早く起きられると被害者であるボクからしたら不満である。流石にこれ以上はやらないけど。

「……そうだ!アストルフオに抱き締められて気を失ったんだってアストルフオ!」

ボクと視線が合った途端、恐怖に駆られた子供のように顔を青ざめ窓に向かって走り

出す。だが傍にいた秀吉に襟を掴まれ転倒してしまった。頭から壁に突っ込んだけど大丈夫かな。ボクのお仕置き以上のダメージが入ったと思うんだけど。

「落ち着くのじゃ明久よ」

「離して秀吉！今日が僕の命日になってもいいの!？」

「友人を殺すような真似はしないじやろ普通。まあ明久がアストルフオにした行為を考えれば当然の報いかもしれんが」

「う、まあそうなんだけど」

秀吉の言葉に若干申し訳なさそうに瞳を伏せる。そりやそうだ、ボクが長年に渡って守ってきた純潔が奪われるところだったんだから。無くなったモノは取り返しがつかないんだぞ。

どことなく秀吉も口調に怒気が籠っていたような気がした。そうだよね、友人が逆レ○プされることになったら怒るに決まってるよね。やはり秀吉しか勝たん。

「でも本当に悪いのは雄二だよっ！」

まだ罪を受け入れられてないのか最終弁論の容疑者のように必死に雄二を指さす。まだ言い訳をするつもりなのだろうか。

「むっ……どういふことじゃ?」

「……………気になる」

「実は須川くんに命令したのは雄ジャジャンっ!？」

「おっと、手が滑った」

明久の顔に雄二のボディブローが炸裂する。今何か言いかけてたけど何を言いたかったんだろう。明久は残念なことに気絶してしまったようなのでもう聞くことは出来ない。死人に口なしだ。本当に内容が気になるけど。

雄二が何かしたのかな、でも放送したのは須川で身代わりにしたのが明久だったから………あ、思い出した。校内放送の内容を考えたの雄二だったじゃないか。原作でそうだったし何で見落としてたんだろう。

「ねえ雄二」

埃を落とすように手を払っている雄二の腕を掴む。

「ん?なんだアストルフオ。俺の腕なんか掴んで」

「突然なんだけどさ」

「おう」

「地獄って見たことある?」

「そんなことあるわけ——ぎゃああ!俺の腕があらぬ方向に曲がつてうあああ!」

雄二が何か叫んでるけど、きつとボクの柔肌に興奮してしまったんだろう。ボクアストルフオだから。

とりあえず

「悔い改めよ」

「うがああああ!?!あ、改めた!超悔い改めた!だから腕を離せ!」

誰が離すか。

「懺悔なさい」

「俺が悪かった!須川に命令したのは俺なんだああ!!」

何を今更。

「心の底から?」

「ごめんなさい<sup>アームメン</sup>」

……まあこれくらいにしといてやるか。別に今殺らなくてもいつか殺られるだろうし。

「ま、執行猶予付きで許してあげるよ」

「ふ、ふう……危なかったぜ。血走った目の女が視界の端で近づいてきたときには死んだかと思つた……」

腕を離すと雄二はほっとしたように肩を落とす。

そんなにボクの肌が恋しいのなら「いや、遠慮しておく」……まだ何も言っていないのだが。

「秀吉、霧島さんのメアド持ってる？」

「心の底からごめんなさい」

「む、すまぬの。ワシの携帯には入っておらんようじゃ」

「心の底からありがとう！」

携帯を確認した秀吉が申し訳なさそうにする。それは残念だ。もし入ってたら今すぐに霧島さんを召喚して雄二に突貫させるつもりだったのに。

「ていうかお前何で翔子が俺にとつてアレなこと知ってるんだ」

「どことなく疲れたような顔をした雄二がボクに問いかけてきた。

「アレ？ああ恋人関係にあるってやつ？」

「……………（ビリビリ）」

「ははは、発言には気をつけろよアストルフオ。ムツツリーニがスタンガンの調整を始めたからな」

本当だ、しかも両手に二個持ってる。二個も受けられるなんてお得じゃないか雄二。

「ははは、ゴメンよ雄二。そうだね、二人はもう結婚してたんだよね」

「ははは、アストルフオは冗談が上手いなあ。お前もそう思うだろムツツ——」

バタツ（雄二が泡を吹いて倒れる音）

「……………FF F F団の血の掟に従い、裏切り者を粛清した（シュシュツ）」

倒れた雄二の背後にはスタンガンをポケットに仕舞うムッツリーニの姿があった。

さすがは学年の女子の胸のサイズを網羅した男。流れるような暗殺術である。出来ることならその手腕を身をもって理解することのない内に天国に行きたいものだ。その可能性は無に等しいけど。

「……………ッ……………アストルフオ（ぐいぐい）」

「ん、どしたの」

友人である雄二を気絶させた張本人であるムッツリーニにシャツの裾を引っ張られる。

「あ、もしかして秀吉の写真の代金足りなかった？」

「……………（ブンブン）」

頭を横に振り否定の意を表す。秀吉の写真じゃないとするとなんだろう、もしかして昔買った商品の代金を返してなくて催促しにきたのかな。でも前買った秀吉のグッズなんて覚えてないよ、困ったな。

「今ワシとしては聞き逃せないことが聞こえた気がしたのじゃが」

訝しげな顔をする秀吉は可愛いね。

「……………あれ（ピッ）」

ムッツリーニは新校舎に繋がる廊下の先を指さす。何かボクに見せたいものでもあ

るのかな、こういうとき無口だと少しめんどくさい。そこが魅力でもあるんだけどね。ムツツリーニのことだからスカートが捲れていることに気付いていない女の子がとかじゃないの——

ズダダダダダダダダダダ（血走った目で廊下を全力疾走してくる船越先生）  
「戦略撤退っ！」

まさかまだ諦めていなかったとは！恐るべし女性教諭！

足に力を込め全力で廊下を疾駆する。もちろん船越先生とは反対方向に。捕まったらナニをされるかたまたまもんじやない。ボクの初めては秀吉か優子って決まってるんだ！だからこんなところで好きでもない女性に奪われたくなんかない！

「明久くん、逃げないでくださいあーい」

くっ、文字だけ見れば微笑ましく感じるけど音声になると背筋が凍る程気持ち悪いな！出来ることなら優子にそういうことはやって欲しかった。メンヘラ優子とか最高すぎて爆死してしまうわ。本望だがな！ていうかまだ名前間違えてるし！

廊下の角を急ブレーキで駆け抜ける。コーナーで差をつけるのだ。流し目で後ろを確認すると船越先生との距離はかなり開いていた。まだ追ってきてはいるが。何が彼女を突き動かすのだろうか。知りたくもない。

「須川どこいったのかしら……見つけたらタダじゃおかないんだから」

「このままなら逃げ切れ——」

「きやあつ！」

ズデー

頭に強い衝撃が走ったと思つたら、可愛い女の子の声が二つ——といつてもその内の一つはボクなのだが——聞こえてきた。ま、まさかアニメでよくある「いつけなあくい、遅刻遅刻うっつけてきやあ！」が起きてしまったのだろうか。……こんな危機的状况で!? 空から美少女が降ってくる可能性と等しいあの美味しい状況が!? 一番来て欲しくなかつたよ、くそ。

これとびつきり可愛い女の子じゃなかつたらボクは血の涙を出すね。今この瞬間にも変態は刻々と近づいてきているのだ。ボクの貞操消失カウントダウンが早まったのだ。その代償として割に合った女の子をボクは要求する! まあ、そんな奇跡起こるわけがないか……。 (こうしておけば美少女の確率UP! フラグの正しい活用方法だ!)

「あ、貴方どこ見て歩いてんのよ……ってアストルフオじゃない」

ああ、胸なしか。

「ああ、胸なしか」

「何か言ったかしら?」

「ああ、胸なしか」

「聞こえてるわよ!」

昭和のまな板(笑)が何か言っています。が気にも留めずに逃走を再開します。雑音は無視するのが一番です。特に島田さんの雑音は無視しないと止まらないので注意しましょう。

とりあえず近くにあった教室に飛び込み扉をすぐに閉める。廊下の角のおかげでボクのごとは船越先生には見えていないはずだ。死角というのかなコレは、まあどちらでもいいが。

すーはー、と大きく深呼吸して息を整える。どんな状況においても冷静であるのが重要である。ボクの場合さつきまな板の妖怪と遭遇して萎えたので元々冷静であったが。賢者タイムともいう。

「お、アストルフオもここに隠れ——」

「うわあああああああああ!?!」

「バカ! 大声出したらバレるだろーが!」

突然耳元で気持ち悪い男の声がして、思わず悲鳴を上げてしまう。なんだ!? 変態か!? 声の方を向くとすぐその全貌が明らかになった。胡散臭そうな顔、ねっとりした顔、土砂崩れのような顔、こんな特徴的な顔を持つ男をボクは一人しか知らない。

「……何か用かな須川くん」

「いや、誰かから逃げるようにこの部屋に入ってきたから俺と同じなのかと思って」

内心で罵倒されているのも露知らず、思わず吐き気が催してくる狂気的笑顔を見せつけてくる（本人はイケメンスマイルとでも思っているのだろうか）。確かにこれはアニメや小説ではお届け出来ない現場の味だぜ……!」

「俺と同じって、須川くんも誰かから逃げてきたの?」

吐き気を誤魔化すように話題を振ると、返してくれるとは思わなかったのか街中で誰もが二度見するぐらい整っていない顔を更に歪ませる（本人は喜んでいるつもりなのだろうか）。

「ああ、島田が急に襲い掛かって来てな」

「あーなるへそ」

校内放送についてだな。明久に好意を寄せている島田さんからすればあの放送は大変迷惑だったのだろう。だからといって擁護するつもりはないが。

「まったく、俺のことを好きすぎるからって人前で襲うとは非常識な奴だ」

なんてお前はおめでたい奴なんだ。コイツ霧島さんとかとは違う方向で天才なんじゃないだろうか。自分についての本を売り出したらベストセラーになりそうだ。

「で、お前は？」

正月の福笑いのように顔のパーツがぐちゃぐちゃな須川は凶々しくもボクの肩に手をかけてきた。シャツ越しでも感じるこの疼き、間違いなくボクは生理的拒否反応は起こしている。

……まさかコイツボクのこと襲おうなんて考えたりしてないよな。

いや、有り得る。密閉した空間、中にいるのは二人だけ、しかも美少女（外見は）と男子生徒（中身は）という如何にも《アーツ！》な展開になりそうな要素が詰まってる。事件の香りしかない。嫌だぞ、初のテレビデビューが性的侵害の被害者としてだなんて！

島田さんでもいい。だ、誰か助けて！

バタツ

「それでね、そのとき秀吉が——って何で貴方がここにいるのよ!」

ゆ、優子じゃないか! ディア マイ ガールフレレレレレンド!

目を凝らせば扉を開けた優子の後ろには何人もの女子がいるじゃないか! これで《ア—!》な展開になる可能性は限りなく減った! ありがとう、名も知らぬ少女達!

「「きゃああああああ！先生、女子更衣室に変態がいますうー！」」

後ろにいた少女たちも状況のヤバさに気付いたのか悲鳴を上げて先生を呼ぶ。

素晴らしい判断だ少女よ、今度ボクの握手券を献上しようじゃないか！……………ちよつと待つて、女子更衣室……………？

「ほらキミ、早くこつちに！」

「え、ああゴメン」

少女に手を引かれ須川と離れ離れになる。その須川というと凄い脂汗を流しながら「いやこれは違うんだ、わざと入ったわけじゃなくて」と手をわちやわちやさせていた。何が起こってるのか理解できてないのだろう。実際、ボクもそうだ。

「さっさと出てってなさいこのクソ変態！」

ガシツ（汚いモノを触るかのように須川の襟を指先で掴み）

バシユツ（廊下に放り捨て）

バタンツ（扉を勢いよく閉め）

ガチャツ（鍵を掛ける音）

「お、Oh……………」

変態にクソが追加した！なんてボケることも出来ずその流れるような作業に圧倒される。

「ちよつと待ってくれ！これは誤解なんだああ！」

「大丈夫？酷いことされなかった？」

「ほんつと許せないわね。被害者の会に連絡しないと」

どんと扉を叩く音がするが少女達は気にもせずボクに近寄って慰めるような声を掛けてくれた。なんだろう、本当にアストルフォで良かったと思えた。もしかしたら今頃ボクは須川みたいになっていたかもしれない。

「……アストルフォ」

さっきまで黙ってた優子が近くに寄ってきた。優子はボクの性別のこと知ってるし、外に連れ出す気なのかもしれない。一応、窓への逃走ルートは確保しておく。

「何か、されなかった？」

「う、ううん。何もされなかったよ」

さあ来るなら来い！アストルフォの敏捷Bを舐めるなよつ。

「……………そ。何も無いならいいわ」

「……………」

ちよつと待って、何もされないんだが。逆にこれはこれで怖いんですけど!?

「見つけたわよ須川アアア！」

「し、島田!?!まだ諦めてなかったのか！」

「明久ちゆわあくくん!置いてかないでえ〜」

「うおおおお!?!船越先生まで!?!俺は吉井じゃないぞ!?!」

「逃がさないんだから!」

「アストルフオ、頼む!ここを開けてくれ!そうじゃないと俺は、俺はあああああああ

!!」

60 静かに涙する者、その者の名は須 g ②

## 帰宅

ボクは今、マイホームに帰宅していた。

そう、木下家に。

リアル家なき子になってしまったのではないかと学校の校門で途方に暮れていたところ、偶然そこを通りかかった優子に「貴方まだ帰ってなかったの？」と言われ手を引かれてここに來たつてわけ。

マジ救世主です優子さま。

帰り道に優子に聞いた話によると、なんでもボクの両親は世界一周旅行に出かけているとのこと。

そして学校があるからと一人残されたボクは昔から家族絡みで仲が良かった木下家に居候？させてもらうことになったらしい。

なんだよ、このラノベの主人公にありがちな設定は。

まあ嬉しいからいいけどさ……嘘です、マジ感謝しかないですお母様。

出来ることなら、そのまま天の国に逝ってもらって帰ってこなくてもよし、です。

「うまうま」

冷蔵庫に置いてあったみたらし団子を。もぐもぐとソファの上で頬張る。

食器とか部屋とか日本風だったからか、お菓子もそうなのかもしれない。すごくうまい。

なんだろう、有名なお店の商品なのだろうか。

一流というか高級というか、明らかに俺の店は日本一！という看板を置いてそうな店にある団子だな。いやどういことだよ。

秀吉は新学期初日から部活動に励んでいるので今家にいない。

演劇部だっけ、ボクも他の部活覗いてみようかなあ。前と違って身体能力も上がっているはずだし。

……やっぱり止めとこう、下手したら人を殺しかねない。

ちなみにだが、実はボクは小学生の頃はサッカー少年団に入っていたのだが、新入生の年下にポジション奪われて泣いて辞めた。

今となっては懐かしい思い出である。敵チームのスパイとも呼ばれてたな。DF

やってたけどG Kへのパスがゴールに入ったことが由来である。

わざとじゃないんだよ……。ただパスが異様に曲がってG Kが取れなかっただけなんだ。つまりボクは悪くない、G Kかボールかスパイクか地面が悪いんだ。

「ふーん、やっぱりFクラスだったのね」

優子が冷蔵庫の扉を開けながらどこか納得したような声を出す。やっぱりってことは大体予想は出来ていたのかな。……。後ろ姿も可愛いですね優子さん。

「優子は何クラス？」

「私？ 私はもちろん」

「ちよつと待って、ボクが当てるから」

何かを探しているように冷蔵庫を見ている優子の声を遮る。別にクイズ形式にしないでいいけど暇だったので遊ぶことにする。まあ、結果は知ってるんですけどね。

「私はAクラスよ」

「……………日本語通じてる？」

「失礼ね。貴方と違って純粋な日本人よ」

ノリが悪いと思う。バカテスにあるまじき正しきさつぶりだ。なんというか、彼女が希少な常識人存在だってこと忘れてた。

「ねえアストルフオ、私のみたらし団子知らない？」

「……………何それ美味しいの?」

「美味しいに決まってるじゃない。何時間も並んで手に入れた超人気お菓子なんだから」

まさかだとは思いますが、冷蔵庫に置いてあったアレのことだろうか。それなら質問に答えてられるな。今、みたらし団子はボクと一つになったって。絶対言わないけど。

「おかしいわね……………ちゃんとここに置いておいたのに」

まだ諦めず冷蔵庫の中を探し始め優子。そこにあるわけないじゃないか。だってボクのお腹の中にあるんだから……………。

「ひ、秀吉が食べちゃったんじゃない?」

「秀吉はそんなことしないわよ。ああ見えて弁えるところは弁えるから」

やばい、どうしよう。逃げ道がない。

「そ、それじゃあ空気中に蒸発しちゃったとか」

「それこそありえないわ。どこぞの怪盗じゃないんだから」

「デスヨネー」

オワタ。

「アストルフオ、貴方まさか食べたんじゃないや

—————  
ねえ、その串は何かしら?」

「ふえ?」

「ふえ？じやないわよ！楽しみにしてたのに！」

冷蔵庫の扉をバンツと勢いよく閉め、顔を真っ赤にしながら近寄ってくる。これが優子クオリティ、背後に阿修羅が見えるぜ……！いやマジでヤバイ。転生初日で動かぬ屍になるなんてたまったものじゃない。考えろアストルフオ。この状況を打破する方法を。

恐らく、優子は机の上に置いてあつた団子の串を見てボクが食べたんだと思つたのだろう。だがボクが食べたという決定的な証拠はない。ならまだ誤魔化しは利くはずっ！

「ふっ、これは団子の串じゃないよ優子」

「それじゃあ何だつてんのよ」

「そう、これは——」

考えろ、細長く棒状の物を。

「これは？」

「——耳掻き用の棒さ」

「貴方の耳穴にぶっ刺してあげるわ」

ひどいつ、これが人間のやることか!?

と、優子は呆れたような顔をしながらボクの隣にポフッと座る。な、なんだ。ボクを

殺すには隣に座る必要があるのか。

「まあ、別にいいわよ、今に始まったことじゃないし」

どこか遠くを見つめるような目をして言った。いったいボクは過去に何をしたんだろう。優子にそんな目をさせるなんて。すごく気になる。けどその前に謝らないと、みたらし団子を勝手に食べたのはボクだし。

「優子、その……ごめん」

「……………ふん」

「あうう……………」

やっぱり怒ってるよな……。そうだよね、せつかく並んでまで手に入れたお菓子だったのに。ボクだって楽しみにしていたお菓子が勝手に食べられていたら怒るし。

「そうだ。今度ボクがそのお店に行つてたくさんゲットしてくるよ！」

「……………新幹線じゃないと行けないくらい遠いわよ」

「大丈夫！走るから！」

「やめなさい。貴方の場合本当にやりかねないから」

優子に真顔で止められる。そ、そっか。確かにボクが全力で走つたら迷惑だよ。ソニックブームは起こるか分からないけど人にぶつかったら大変なことになるよね。スプラッター映画みたいに空の彼方に飛ぶことになるだろう。ぶつかられた人が。

「じゃ、じゃあ新幹線に乗っていく！」

「この前フィギアに全財産注ぎ込んだんじゃなかったかしら」

「それじゃあ飛行機！」

「もつと駄目よ！」

頭をペシツと叩かれる。ははは、やっぱりボクは駄目な子なんだ……。

「ああもう。私は本当に気にしてないから、そんなクヨクヨしないでよね」

「だってえ……」

「ほら。のの字なんて書いてないでシャキッとしなさい」

優子が気になしてもボクは気にするんだよ。よし、今度優子に秘密でそのお店に行こう。お金が貯まったら。……あれ？お小遣い制なのかな、それともお年玉だけで生きる制なのかな。どっちなんだろう。後で秀吉に聞いておこう。

「それじゃ、私宿題しなきゃいけないから行くわね」

「え、ああうん」

優子が自分の部屋に行ってしまったので、リビングにはボク一人だけになった。無駄に広いから一人ぼっちだと寂しくなるなあ。

「……ボクも自分の部屋に戻るか」

独り言のように呟き、ソファから跳ね起きる。

てくてくと廊下を歩くと自然とボクの部屋が見えてきた。

扉に『アストルフォの部屋☆』と書かれたプレートがぶら下がっているのがボクの部屋だろう。逆にこれでボクの部屋じゃなかったら目を疑うだろう。

「えい」と扉を開け放つと、目の前に飛んでくる——ぬいぐるみの山。

正確にはベッドの上に置いてあったぬいぐるみのことなのだがその量が凄い。クレーンゲームで取ってきたよというのが分かる程にくだらないぬいぐるみもあるし、通販で選んで買ったんだらうなというぬいぐるみもある。

その中から適当に一つ掴む。

「これ……なんで取ったんだらう」

おっさん顔の犬のぬいぐるみは到底ボクの趣味ではない。キモカワイイに分類されるものだろうか。まったく気持ちが悪く理解できないな。可愛げがないんだよね……。ぼいっと投げ捨てて、何か面白いモノはないかと部屋を見渡す。

たくさんのおもちゃ。

たくさんのおもちゃ。

たくさんのおもちゃ。

たくさんのおもちゃ。

………秀吉？

思わず二度見してしまう。良く見るとそこにいたのは秀吉ではなく秀吉がプリントされた抱き枕であった。こんなものをボクは買っていたのか……！アストルフォ、やつてくれるじゃないか。たぶんムツツリーニお手製の枕だろう。

こんなクオリティの高いものが一般人に作れるわけがない。まあムツツリーニも一般人なんだけどね。

チラツと壁に掛かっている時計を見て時間を確認する。よし、まだ秀吉が帰ってくる時間じゃないな。後一時間は大丈夫だろう、優子も今は宿題に取り組んでるし。

さて、と

「むふうつ」

秀吉の抱き枕に抱き着き、頬擦りする。このフワフワ感……どこことなく秀吉の柔肌に似ているような気がする。本物には遠く及ばないが、恐るべしムツツリ商会。企業化も夢じゃないな。

「うにゆにゆにゆう……」

おお、秀吉にばかり目が行っていたがこの服装……メイドドレスとは最高じゃな。うむ、まるで今の時間が夢のように思えてくる。元の世界でも、流石に抱き枕とかは買わなかったからね。こういうのは初体験なんだよ。……ちよつと待って、これだと初体験が秀吉だと誤解されてしまうような……？

ま、もう手遅れだしっか。時すでにお寿司。最早、ボクを止めることはできない！

「えへへへ」

更に秀吉を感じるためにギュツと抱き寄せる。ふわあ……秀吉の顔が近いよお……。

「ん……秀吉い……」

「呼んだかの？」

うわあ、こつちにも秀吉がいる。たくさん秀吉がいるなんてボクは幸せ者だな。神様、ここが天国というヤツですか……？

「つて秀吉!？」

「秀吉じゃぞ」

後ろを振り向くと、いかにも今帰宅しました風の秀吉が扉の前に立っていた。う、嘘でしょ……だって時間はまだまだあるはずだし……。それに、なんだろうこの気持ち。まるで浮気現場を見られた三十歳男性の気分だ……。うぐつ、何故か胸が痛む。何なんだこの痛み。

胸を抑え、時間を確認すると不思議なことに時計の針が一周ぐらい進んでいるような気が。

……Oh。

絶対見られたと思うけど、一応背中に秀吉（の抱き枕）を隠す。

そして、秀吉に向き直って

「あー違うんだよ秀吉。これはちよつと寝ぼけちゃって起こった事故であって決して故意にやったわけではないのですはい」

「? ……あ、もしやその隠せてない枕についてかの?」

バレてた。

捧げるように、秀吉の抱き枕（上目遣いメイド姿バージョン）を背中から取り出す。

「ご、ごめん……その、そういうことしちゃうお年頃っていうか」

「む?今更謝られると変な気分なのじゃが……、別に今に始まったことではないしのう」

「え、どゆこと?」

「どゆこと……と言われても、下着姿で過ごし薄い本をよんでニヤけてる姉と下着すら着ないで夜中襲ってくる幼馴染と何年も一緒に生きたら、慣れるものじゃからな……」

そのときの秀吉の顔は、悟りを開いたブツタのような菩薩顔だった、とだけ言わせてもらおう。